

なほ

1 月号
vol. 167

謹賀新年 11月1日 02:01



特集

草の流氷に かわ

三味線皮——人と動物の合流点
後編

〔第6回〕

皮革のまち、西成・浪速。
革にまつわるモノゴトを
蛇行する川のごとく
訪ね歩いていきます。

革の流れの 革の流るるに

[第6回]

後編 三味線皮——人と動物の合流点

うになった過程を明らかにする史料はまだ確認されていないが、当時の人びとの暮らし向きがヒントを与えてくれる。どうやら、いろんな動物の肉を食していたらしいのだ(のび(一九九八)を参照)。

「西成には野良猫や野犬を取る業者がいた」ということは、いつの頃からか耳にしていた。しかし詳しく知る人は誰もいない。それはこの地域の歴史の一幕。この特集で取り上げない手はないと思いつき、かつて「西濱」と呼ばれた地域の歴史に詳しい浅居明彦さんと太田恭治さんを、寺本館長とともに訪ねた。後編をお届けする。

江戸時代の食肉文化

三線が猫皮を使った三味線にカスタマイズされ日本列島に普及していったのが、16世紀後半の織豊時代から江戸時代にかけてのこと。猫の皮が使われるよ

肉食は止みませんでした。

浅居 犬肉食はどうやら室町期からみたいです。もちろん、猫は中国から来た貴重な動物だったので、昔から愛玩用として飼われてたのもいます。けど、「薬喰い」と称しているんな獣肉が食べられていたんです。

太 私は兵庫県北部の生まれで、子供の頃、近所の大人が冬になると猫鍋をしていたのを憶えています。犬肉は都会でもあったでしょう? こういう食文化があるからこそ、いろんな動物の皮で三線という輸入楽器に適した素材を試せたのでしょうか。太鼓皮(牛皮)を張った三味線の音を詠った川柳「安い三味線は太鼓の皮ではり(安政7年)が残っています。

また、こんな話も——江戸時代に、泉州の男が堺の町に出て行って猫を獲った。が、それが飼いたい猫やったらしい。で、奉行所に連れて行かれて、「なんで猫獲っ

た?」って訊ねられて、白状して。「三味線皮にしました」って。

浅 「撰津役人村文書」によると大坂の渡辺村にも同じような者がいたそうです。

近現代のエアポケット

太 それが明治になるとすっかり状況が変わってしまふ。次第に犬や猫を食べないようになって。まず、犬は「狂犬病」を取り締まるために国が管理し、役人が犬を獲らなければならなくなつた(一八九六年、獣疫予防法の制定)。けど、一般の役人に務まるはずもない。それで、元々やってた者がやるようになったのは自然の流れだと思えます。つまり実情は、江戸時代からの獣肉や皮を作る職人の伝統の力を役所が借りたということです。

浅 捕獲された野犬は何日か保管され、誰も取りに来なかったら殺処分される。死骸は焼却さ



図1 大坂の町中の肉屋(左: 萬里焼所、右: [撰津名所図会]より)



図2 捕獲動物の運搬（『洛中洛外図屏風』より）

皮作りは「裏の仕事」のようにされてしまった。

浅 動物愛護法はさらに厳しくなり、二〇一三年の改正で行政は「処分した動物を業者に卸すことはしない」となった。これで犬の皮も猫の皮も全部、仕入れられなくなり、業者は廃業に追い込まれてしまったんです。

愛でることと殺めることの間

れるんですけど、その間に皮業者が入り、死骸を選別し持って帰った。その当時は動物愛護法もあまり厳しくなかったもので、法の隙間があったんです。

浅 いったったかの動物愛護法改正のときに、田中真紀子氏の一声で付帯決議が付きました。その趣旨は「日本の伝統芸能を絶やさないよう各都道府県知事は努めなさい」、つまり黙認できる部分は黙認して、伝統芸能の保存を妨げるな、ということ。愛護法では禁じているけど、もう片方の付帯決議でバランスをとった。

太 その付帯決議を抛りどころ

つ文化とか生活のことが理解されへんのかな？

太 そうですね。それで、結局そのツケを三味線皮業者が背負う。三味線の棹を作ってる人は称賛され、皮を作ってる人だけが批難される。三味線を弾く人は人間国宝になっても、皮を作る人は一方的に攻撃される。

寺 牛や豚と同じように、犬や猫の畜産も認めるべきでは？

太 過去にそういう動きもあつ

に原料を確保できるよう努める活動もありました。ある県では博物館の学芸員がものすごく努力して、一九九五年にある三味線皮業者さんを県の選定保存技術者に認定した。ところが、動物愛護団体が議会に「認定を取り下げろ」と騒いだそうです。

動物愛護法はさらに強化され、今では野良猫を殺した場合、500万円以下の罰金または5年以下の懲役です。あんまりなので大阪府の行政に確認すると、「付帯決議は消えました」「業者さんに気の毒なのは認識していますが、法律です。野良犬野良猫は出しません」と言われた。

浅 ところで野良犬は見なくなつたけど、野良猫はたくさんいる。

寺本 猫が街中いっぱいで大変。飼ってる猫が増えすぎて世話ができずに「ゴミ屋敷状態」になってる。

若松 「多頭飼育崩壊」と呼ば

のきっかけで闇商売が横行しな

寺 需要があつても供給が追いつかへんから、高値で出回るようになる。そら、闇も生まれてくるわなあ。

太 だからね、業者さんは「そんなに『やめろ』って言うんなら、ワシらはいつでも止めれますよ。必要でないなら、三味線弾きのみなさんも三味線皮でない楽器にしたら、わたしらも（事業を）

れて社会問題になってますね。ニュースでその家の人に理由を聞いてました。「殺処分されるのが可哀そうで施設に渡せなかった」そうです。

太 今、動物愛護団体がNPOを作ってる。里親制度は、対応策の一つとして評価できるけど、絶対に殺したらアカンというの難儀な話です。昔は愛でることと殺めることの間には緩衝帯があつて、いろんな生活の術や知恵が働いてたように思います。

寺 動物愛護団体の人には、動物の命をいただくことで成り立



図3 犬取り（『洛中洛外図』より）

止めれます。政府もそれをちゃんとしてほしい。結局、わたしら

のことを認めなかったら、闇商売になりますよ」とって気持ちです。

浅 昔から言うように、「重宝がられこそすれ、蔑みの目で見られる筋合はない」。やめてしま

寺 江戸時代からずっと、差別

されてるマイノリティが社会の底辺、とくに日本社会のリサイクルの部分をしっかり担ってきた。そこを社会が認めようとしてないと、絶対におかしい。部落の歴史を勉強すればするほど、ほんまに、そこは「世の中の人、もつと目開け」って言いたくなる。

参考文献…のびしょうじ「食肉の部落史」明石書店、一九九八年。

文責：若松司

取材協力：寺本良弘

図4 猫塚の前に猫



1967〜75年 アート・シアター・ギルド1

1970年代という時間は、私にとって記号的、暗示的意味のある特別な歴史だったと記憶する。みずからの無知を知らされ、社会への関心を強いられ、なによりもみずからに微塵の力もないことを知らされた。時代という時が変幻し、遙かな遠い現在のこの地に漂着してしまった今、ごく私的なその記憶の断片をかき集め、私がいた70年代を確認してみたいと考えた。

くらし応援室／楽塾・佐々木敏明



ATG

「日本アート・シアター・ギルド(ATG)」は既成映画会社の配給ルートに頼らず、製作費1千万円という当時でも破格的低予算で映画作りを続けてきた組織だった。ただ60年代初期は映画製作というより、海外の優秀な作品を我国に紹介または配給し、それらの作品の上映活動が中心となっていた。

映画評論家である佐藤忠男氏によると、57年に若手の映画人たちが結成した(シネマ57)というグループが母体となって(日本アート・シアター運動の会)が発足した。日本に非商業主義的な芸術映画の専門館を作る目的だった。この趣旨に映画輸入会社や大手映画会社、編集者などが参加し、札幌、東京、名古屋、大阪梅田の北野シネマ(阪急ファイブ)現(ヘップ・ファイブ)の真

ん前にあり、僕らは「北シネ」と呼んだ)、福岡などに上映の常設館ができた。

60年代前後は映画人口が降下しつつある時代で、既成映画に飽き足らない映画好きにとってATGの存在は珍しかったと思う。

ATGの第1回上映作品は62年、東和映画社が輸入配給したポーランド映画『尼僧ヨアンナ』(イエジー・カワレロウイチ監督)だったが、その後『ウンベルトD』『ヴィットリオ・デ・シーカ』、『野イチゴ』『第七の封印』(ともにベルイマン)、『ぼくの村は戦場だった』(アンドレイ・タルコフスキー)、『去年マリエンバードで』(アラン・レネ)、『かくも長き不在』(アンリ・コルビ)など研ぎ澄まされた作品が続々登場する。

佐藤氏は、これら62〜67年の公開フィルムを(第1期ATG)

と称している。僕は第1期の頃のATG情報に疎く、67年までに上映された作品の多くは、その後リバイバル上映され追体験した。この拙稿は、佐藤氏が示す時系列を参考にした。

これら上映作品の中には、例えば25年に製作された『戦艦ポチョムキン』、38年の『アレクサンデル・ネフスキー』(ともにエ

イゼンシュテイン)や、41年の『市民ケーン』(オーソン・ウエルズ)なども含まれ、上映された作品の製作年代は、必ずしも最新作あるいは同時代的作品ばかりではなかった。

ATG上映作品を調べながら、僕自身は67年の頃からATGに興味を持ちはじめている。(第1期ATG)で上映された作品の多くは、(シネマ57)の委員たちが、欧州を中心とした諸作品を選定し上映権を獲得したうえで上映したもので、独自に製作し

ていこうとした邦画作品はこの時期まだ少なかった。

第2期ATG

佐藤氏が(第2期ATG)を67〜79年に定めた理由は、(第1期ATG)以降、ATGと製作提携した邦画作品が、洋画作品と比べ圧倒的に数量を増やしはじめた時期だからと思う。とくにATGの存在感を特異にさせたのは、既存の映画会社に飽き足らない作家たち、例えば大島渚、黒

木和雄、寺山修司ら多くのクリエイターたちが独立プロを設立し、競ってATGの作品づくりに参加した時代だったという印象を強く感じる。

67年大島渚が演出した『忍者武芸帳』は、北シネで見た僕のATG最初の体験作品だった。この映画は白土三平の原作劇画で、白土作品の静止画を撮影し、それに登場人物たちの声を吹き

込んで映画化したものだ。白土+大島渚を期待したのだが、アニメでもなく実験作としても、見終えた印象があまり面白くなかった。今一度見直してみると印象が変わるかもしれないが。

70年代に入り、ブニユエル、ゴダールなどヨーロッパおよび仏のヌーヴェルヴァーグの作家たちに影響を受けた日本の若手映画監督たちが活躍する舞台となり、前衛手法を中心とした映像作品が多く上映され続けた。そして何よりも戦後の経済社会、安保体制の中で育ちゆく我ら世代の日本という国への疑義と反抗機運がATG作品の映像表現にも強く現れ、怒れる作家たちの作品が支持された。

その70年前夜、東大や諸大学に発する学内闘争や、ベトナム反戦、沖縄返還闘争が全国に波及した。同時に日米安保条約阻止、三里塚(成田空港)建設反対

闘争、水俣病弾劾など厳しい社会状況の日常から世相の変遷は、多彩な創作者たちに発信の機会を与えた。

ATGは、僕自身の日常活動に刺激を与え、多くの映画ファンにも独創性と想像力を注ぎ込む応援団として、そして対抗文化として大層かっこよかったのである。何よりもATGをシンボル化した伊丹十三氏のロゴマーク(*)は、僕にとって映画へのあこがれをより一層強くしたのだった。

*当時制作され宣伝などに使用されていた「ATG」ロゴマーク(前頁の扉。制作者はデザイナー、俳優でもあった伊丹十三氏。

参考文献

佐藤忠男監修『ATG映画の全貌』/外国映画篇『夏書館』1980年。
佐藤忠男編『ATG映画を読む』—60年代に始まった名作のアーカイブ』フィルムアート社、1991年。

見聞き、サイイン・イラスト構成「ATG」/hidamiraki

[沖田一志] 今年の目標は「有休消化」。平日に休みを取っても電話はかかってくるので有休取得する気になれない。でも最近、秘案を思いついたので試してみようと思う。



[佐々木敏明] 黄やえんじ紅散らす三島の忌小柴氏直く立冬の天に火星や地にカミオ冬ざれや諦念でなく悔いでなく



[田岡秀朋] 高校時代から続いていた大晦日恒例の初詣は自粛。ひざを突き合わせ、くだまく日常に戻れるよう、今年是我慢のスタート。



些事争論

些事でも何でも気になったらあれこれ考えてみよう。いいこと思いつくかもしれないし。気づいたら西成にたどり着いていた、或るオタクのお気軽系コラム。

『テストにほとんど出ない 三国志』

歴史上の話ではじめて面白いと思ったのが『三国志』だった。約1800年前、中国大陸が魏・呉・蜀の3つの国に分かれ、群雄割拠していた時代のお話。

知ったきっかけは『真・三國無双』というゲーム。遊んでいるうちにその内容が気になり、友人に借りて読んだのが横山光輝の漫画『三国志』（以下、「横山版」）だった。

この漫画の主人公は後に蜀の皇帝となる劉備。関羽・張飛と「桃園の誓い」で義兄弟となり、漢の復興のために戦う物語である。一見、漫画の王道のようなストーリーだが、史実を基にしているだけあって、味方同士足の引張り合いなど、かなりドロドロとした展開などもあり、とても面白い。

横山版には敵・味方問わず、魅力的な登場人物がたくさん登場する。敵として最も魅力的なのが、魏の礎を築く曹操である。曹操は強大な力と数多くの優秀な部下を持つ、劉備の最大のライバルであり、この二人は幾度となく戦う。

フィクションであれば、最後に主人公が敵を倒しハッピーエンドとい

う展開が定番だが、現実はその甘くないようだ。劉備と曹操は決着をつけないまま寿命を迎えてしまい、その後は、漫画後半の主人公と目される蜀の諸葛亮とそのライバル・魏の司馬懿の戦いへとつづいていく。

当時、私は魏・呉・蜀、どの国が天下を統一するのか、わくわくしながら読んでいた。しかし、蜀を滅ぼした魏に内乱が起こり、新たに晋という国が建国され、晋が呉を滅ぼして天下統一を果たしたという、なんともあっけない最終回だった。その時は「なんやそれ？」という感想をもったが、逆にリアルで面白くなった。

横山版は、中国の明の時代に書かれた『三国志演義』という歴史小説を基にしており、馬に乗りながら50kg以上もある武器を振り回したり、呪いで人が死んでしまったりなど、相当に脚色されている。史実7割くらいのイメージだが、脚色の入れ方が絶妙で、それがまた面白さに拍



ハンブレイ・T



地震と津波を想定した避難訓練。経験のない子どもには難しいかもしれませんが、イルカの頭巾をかぶって地震時の行動や避難路を確認、実際に体験して学びました。



たぐの 3くふうたま

体感

体感

ハナレバナレになった人とまち。くらしの窓から紡ぐヒントを探してみる。

コロナ禍の3密予防でハナレバナレを余儀なくされている。最先端の「会わなくても済む技術」の開発は距離の確保ばかりを加速させ、暮らしの中のリアル感をどんどん失わせはしないかと危機感が募る。一方、移動手段として自転車に注目した記事に遭遇し、幼少からの自転車乗りの僕は期待を寄せている。こんな時代だからこそ大切にしたい「体感」の詰まった乗り物、自転車の魅力をお話ししよう。

魅力に翻弄されたのは、電車で通っていた通学路を初めて自転車に乗り換えたときのこと。通学路ですら「未知」だったことに気づき、自宅と学校、二つの点がつながった瞬間、世界が一気に広がった。以来、自分の足で行かないと気が済まない「病」を発症。スポーツバイクは症状を悪化させ、スピードと距離が飛躍的に拡大。道路の傾斜、凹凸、風向きや気温、景色の変化は時に立ち止まらせ、「また来たい」と思わせてくれる。今や「乗ること」自体が目的と化すほどの「重症」。…不謹慎な表現、お詫びします。

(安田拓也)



[安田拓也] 楽塾は昨年未の赤信号手前で中止に踏み切った。エビデンス以前の体勤を信じた塾長判断にブラヴォー！ さて楽しみの新春若手ワークショップ公演は無事開催なるか。

[西田吉志] 新しい年のはじまりですね。2020年は最後の最後で力尽きてしまったけど(汗)、新しいことにもチャレンジできたし、仕事の幅を広げることができた年だった。21年はどんな年にしようかな。

[寺島史視] 今年は「ゆ〜とあい」の新年の開館とともに、やってみよう屋もスタートする。新年早々、コロナと向き合いながらだけど、2021年もよろしく願います。

[谷口円] 今年の抱負は「学ぶ」です。足りないものを身につけて、自分の適性を見極めることが目標。デザイン、行動経済学、マーケティング、編集、統計学あたりをやってみたいと思います。

葉っぱの吐息

私は草木が大好きです。とくに観葉植物には心癒されます。私と葉っぱのお喋りを聞いてください。



「春が恋しい葉っぱ」の巻

裸んぼうの木の枝に私だけが揺れている。ひとりぼっちはいや、だから泣き叫んだ。一羽の鳥がやってきた。泣かないで。寂しがらないで。もうすぐ裸んぼうの木の枝は、ちびっ子たちの葉っぱで包まれる。産声の合唱につられて鳥たちも歌いだす。でも今はがまんするとき。楽しいことを考えるとき。笑顔を忘れないとき。私は鳥と同じ気持ちになった。

赤井まゆみ

ご挨拶

2021年も葉っぱの気持ちを吐息にして皆様に伝えたいと思います。よろしくお願ひします。

皮算用 胸算用

にしなり隣保館の館長が日々の出来事について胸のうちに皮算用していることを語っていくよ。



(寺本良弘)

い湯かげん

労働者協同組合法が成立

労働者協同組合法という聴き慣れない新法が国会で成立した。簡単に言えば、「雇う／雇われる」株式会社ではなく、共同で出資して共同で働く事業体にも法人格が与えられるということだ。

20年以上も昔、西成のまちづくりでも、子育て中の母子家庭等のお母さんが、個々人の事情を配慮し合って働く「クリック」という事業体を立ち上げたことがあった。当時は、適合する法人格は見当たらず、毎日型配食サービスを担当してきた「西成ボランティアバンク」も法人格を持っていなかった。クリックもボランティアバンクもコンセプトは「働くことでまちづくりに貢献する」で、新法も

「持続可能で活力ある地域社会に貢献する」と目的を謳っている。

類似のNPO法では従事者の出資は認められていないし、事業項目も福祉やまちづくりなど20分野に限定されている。NPOは「市民活動」に適しているが、労働者協同組合は「市民生産」を奨励する。その代わり最低賃金などの労働法規も適用される。ウーバーイーツが若者に人気なのは「雇う／雇われる」に代わる「自由な働き方」なんだが、生産活動の全貌はまったくわからないまま一方的に失職してしまう欠点がある。その点、労働者協同組合は「民主的運営」「情報公開」を社是とするから、もっと自由に働けると期待

できる。

この労働者協同組合が地域社会に貢献すると言っても、直ちにそうなるわけではなく、地域社会の受け皿づくりが欠かせない。まずは、発想の転換が必要だ。自治体と市民の関係は、税金を納め、セオリーだ。しかし、税だけでなく、地域のために働くこと、活動するという「税外」行為もセオリーに加えてみるのも良いのではないか。これからの自治体は、市民サービスが増えこそすれ減ることはない。その度に公務員を増やすのも、民営化するのも常に短し褻に長しだ。もう一つの「自治の力」として市民活動、市民生産が注目されても良い。

ボクは、長年、公共サービスの「(市)民営化」を提唱し、自治体の入札制度改革に取り組んできたから、自治体が変われば、「自治の力」はもっと強くなれると確信する。元々(株)ナイスも株式会社だが、市民生産事業体だ。寺嶋社長は労働者協同組合法に注目してみる

のも良いと思う。いずれにせよ、「雇う／雇われる」や「税を納め、サービスを受ける」という常識からの転換を図るのは良いことだ。さて、都構想はもう終わった。しかし、肥大化してしまつて、市場にも疎いが、市民にも遠くなつた政令市としての大阪市には、やはりニア・イブ・ベターの改革が必要だ。総合区も提案されていることだし、自治と市民の関係を、市民活動、市民生産の振興という観点から考えてみるのは有意義だ。労働者協同組合法もその契機になればと思う。



富田一幸

人間のしあわせ、福祉のあり方、そして新しい社会の結びつきを求めて、これからも「いい湯かげん」のテーマ探しに出かけます。



[若松司] 昨年は猫も杓子も「鬼滅の刃」。でも、ボクは「進撃の巨人」のほうがいいな。「…の呼吸」も「JOJO」の「波紋法」にインスパイアされたんじゃないかと勝手に思ってる。



[山村裕太] 炭水化物を抜くと痩せると聞きました。米・麺・パンなどなど。別に痩せなくてもいいかと思いました。

地域の縁を心でつなぐ

心の時間



眼が養われます。また、恩師からは「世間には、山ほどウツがある。ウツがウツと気づくとき、真実に出会っている」とも教わりました。

ある裕福な未亡人が再婚しました。再婚相手の男性はお金遣いが荒く、数年後、借金の返済で疲れていたこのご夫人に、知人たちは「お金目当ての男性と離婚しなさい」と助言しました。しかしご夫人はそれを受け入れず、全ての財産を失い昨年亡くなったと風の便りで聞きました。

ウツに気づいていれば違った結果になったことでしょうか。頑固な性格を否定しませんが、脱皮を繰り返して「柔軟性」が身につくならば、これも大切な「智慧」にちがいありません。

松向寺 通法

寺院では、お正月の法要を、新しい年を迎え旧年の過ちをあらためる（修正する）意味をもつ「修正会」と呼ぶことがあります。かつて私は恩師から「脱皮と成長」の大切さを学びました。脱皮とは「今まで抱いていた古い考えや習慣を捨て去る」ことですが、この脱皮を繰り返せば人の「こころ」は成長し、ものごとの本質を見抜く

ココロ

ココロがドコ？
わたしはゆ～とあい
編集部が厳選した
「にしなり100景」
大公開！

少年少女が何かを訴えている像です。比較的目立つ場所にあるので、見かけたことがある方も多いのでは。ココロがドコだかわかった人は、ゆ～とあいの受付まで！正解者にはドリンク無料チケットをプレゼントいたします（先着10名様限り）。回答期限は1月末日、ふるってご回答ください！

【先月号の答え】 天下茶屋！丁目にあるニューナショナル温泉でした！人間乾燥室は、温風で体を乾かすものらしいです。



2017年9月撮影



ゆ～とあい

にしなり隣保館

にしなり隣保館「スマイル ゆ～とあい」は、地域コミュニティ全体が抱える課題の解決をめざす民設民営の福祉施設です。日々悩んでおられる困りごとはありませんか？お悩み解決のためにできることをいっしょに探しましょう。

なび1月号(vol.167)
発行日:2021年1月1日(創刊日:2007年1月1日)
発行:株式会社ナイス
住所:大阪市西成区長橋3-6-33
電話:06-6563-1156
E-mail:info@nice.ne.jp
url:http://www.nice.ne.jp/

編集長:若松司
編集:沖田一志、佐々木敏明、岡田秀朋、寺島史規、西田吉志、安田拓也、山村裕太(あいうえお順)
イラスト:hidarimakい デザイン:谷口円

facebook: <https://www.facebook.com/navi.nishinari/>

facebook

